

St. Luke's International University Repository

さまざまな場所に求められるPeople-Centered
Nursing Care; 教育の立場から:
さまざまな場所に求められるPeople-Centered
Nursing Care

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 有森, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00015287

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



さまざまな場所に求められる People-Centered Nursing Care ——教育の立場から——

有森 直子

I. はじめに

聖路加看護大学21世紀 Center of Excellent（以下、COE）プログラム「市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点」（2003～2007年）は、15件のプロジェクトが活動し、筆者はそのひとつ「日本型遺伝看護の創生と普及」（以下、遺伝看護プロジェクト）の研究代表者であった。今回、COE が終了し約10年経過した節目に People-Centered Care（以下、PCC）について「教育の立場から」という振り返りの機会を得た。

当時、筆者は母性看護学・助産学の教員であり、COE の活動を学生に紹介する立場にもあった。PCC の活動は、筆者自身の学位論文、大学院での遺伝看護学の開設等とも関連して進行した（図1）。今回は、当時学生に教育的立場で提供した活動の機会と、その後の卒業生・修了生の活動を報告したい。

II. 「日本型遺伝看護の創生と普及」の活動

遺伝看護プロジェクトの目標は、親から引き継がれた「いのち」をその人らしく生き抜くために、家庭、学校、社会というコミュニティが共に考えるためのプログラムを構築し評価を行い、最終的には概念化を目指すという壮大なものであった（聖路加看護大学21世紀 COE プログラム事務局, 2008）。具体的な内容は、一般社会、看護職（学生）への遺伝看護教育（いのちの教育含む）、意思決定支援の紹介を中心に活動した。当時は、「パートナーの市民ってだれ？ どうやってパートナーシップを組むの？ なにをすればPCC？」について常に自問していた。まさに暗中模索状況にあり、自らの修士論文のテーマでもあった意思決定支援と遺伝看護をキーワードとして、始めは一般社会、看護職（学生含む）への教育的活動が主であった（図2）。今回は、現在につながっている主な活動を紹介する。

1. 遺伝看護：「ダウン症候群のよりよい成育環境検討会（ポルカの会）」の始まり

当時、学部の科目として「遺伝看護学」は配置されておらず、選択科目として開講されていた。その授業のなかで、地域で暮らす親子の生活と親の会の運営について学ぶ事を目的に、学生が大学の近隣地域にある「ダウン症候群の親の会」に参加する内容を組み入れた。この授業で、学生は親子から具体的な生活のようすを学び、一方、親の会のメンバーは自分の子どものために将来の看護職を育てるという意識をもつことが明らかとなった（小屋野, 2011）。そして、看護職と親の会が協働する「ポルカの会」が発足した。年数を重ねて学部生が卒業研究でプログラムを担当したり、外部講師も会の運営に参加するという変化もみられた。

2. 意思決定支援：研究者とのネットワーク

意思決定支援については、オタワ大学のアネット・オコナー氏の招聘（駅伝シンポジウム）や同大学での研究員の研修の機会をいただき、オタワ個人意思決定ガイド、葛藤尺度の日本への導入普及に貢献した（有森, 2017）。

III. 若手研究者の教育

1. 学部教育

看護ゼミナール「遺伝看護」（選択科目20人）では、演習科目として地域で暮らすダウン症候群の親子の実際の暮らしを理解する目的で、大学に隣接する区の親の会の活動に参加した。家族発達看護論Ⅱ（選択科目5～9人）において、「出生前検査」について授業を行った。また、ヒューマンセクシュアリティでは、「こどもへのいのちの教育」について3年生100人に講義を行い、その後学生のボランティア活動へとつながった。1年生には、看護援助論で「意思決定支援」について講義を行った。

その結果、卒業研究は2006～2012年の6年間に地域で暮らすダウン症候群や染色体異常の家族に関する理解やケア、教育プログラムの作成、出生前検査の意思決定支援等、13件にも上った（表1）。

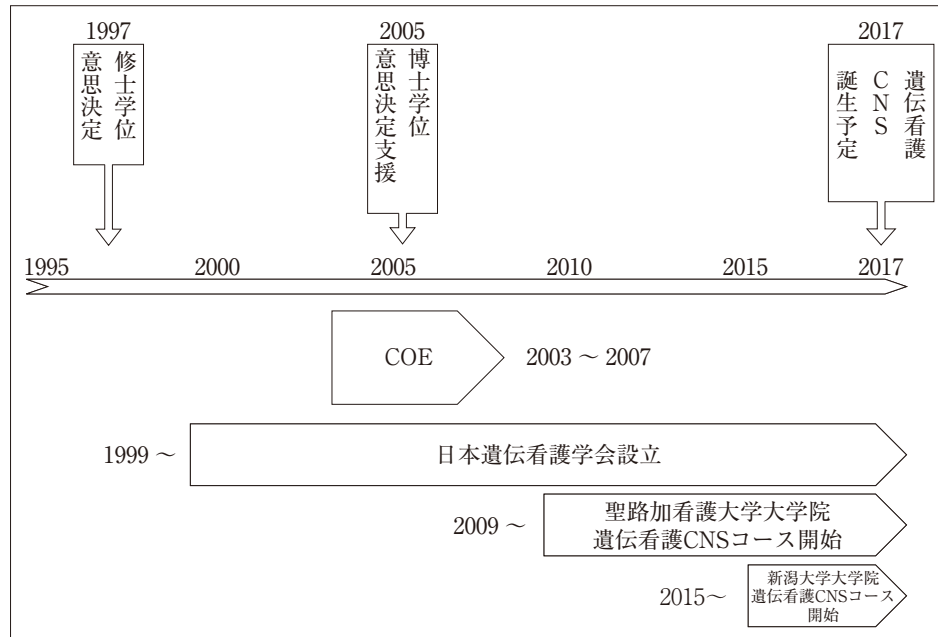


図1 COE 関連年表

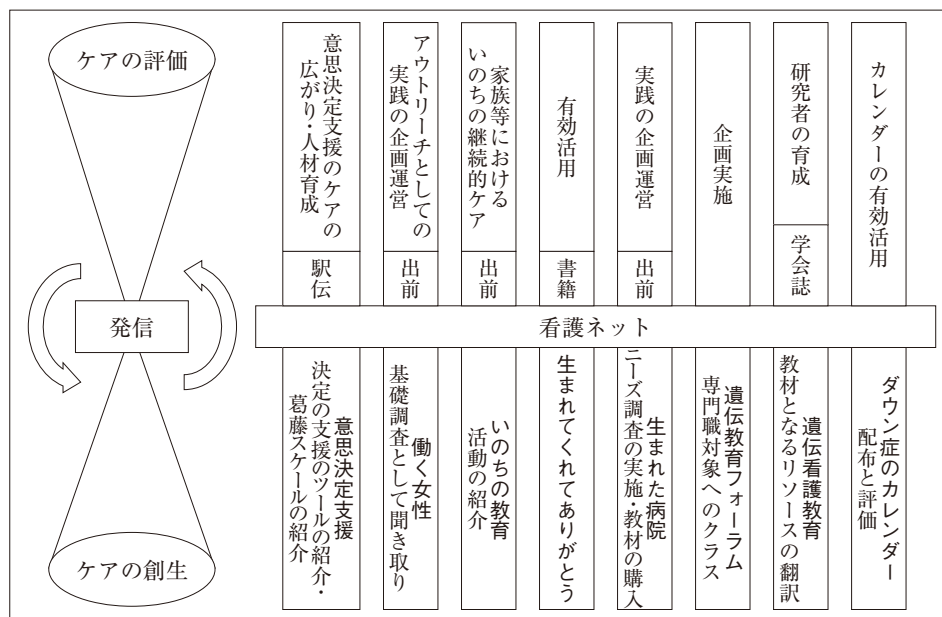


図2 遺伝看護におけるケアとその目標

2. 大学院教育

大学院の科目では、助産学特論、遺伝看護学特論・演習、課題研究（ウイメンズヘルス・助産学、遺伝看護学）において、PCCに関する内容に触れた。特に、「ダウン症候群のよりよい成育環境検討会（ポルカの会）」の企画運営をはじめ、科目外でも、COEの後につながった市民団体との講演会等に学生として参加する機会を提供した。

その結果、大学院での研究（課題研究等）では、2008～2012年の4年間、ウイメンズヘルス助産学、遺伝看護学の院生が、PCCに関連した意思決定支援、遺伝教育に関連した論文を書いた件数は、11件であった（表2）。

3. 国際的協働研究

遺伝看護学では、国際遺伝看護連盟（International Society of Nursing Genetics）の重鎮であるイギリスの Dr. Heather Skirton との協働研究および、大学院院生への教育支援を得ることができた。

意思決定支援では、カナダオタワ大学の Dr. Annet O'Conner の多大な支援を得て、Ottawa Health Institute との組織的な交流をもち、グローバルな研究活動を展開することが可能となった。

表1 卒業研究（2006～2012）

カテゴリー	氏名	年度	タイトル
A：対象から学ぶから共同事業へ	立花洋子	2006	出産後にダウン症の告知を受けた母親の児への愛着 —妊娠から就学にいたるプロセスを振り返って—
	小屋野幸呼	2010	先天性疾患親の会に看護学生が参加したことに対する親の体験
	赤羽麻理	2011	T区で生活するダウン症候群児とその家族が必要とする支援について
	井田早希	2011	B区ダウン症候群親の会と看護学生の協働による、療育プログラムの作成と評価
	川野嘉子	2012	ダウン症候群児のセクシュアリティ教育に関する親の認識 —『豊かなセクシュアリティを育むために』講演参加者を対象に—
	権藤尚子	2012	学童期ダウン症児への音楽を用いた療育プログラムの実施 —親の会と看護学生の協働を通して—
	大城友希	2012	ダウン症候群児・者の健康手帳のニーズと普及に関する課題
B：意思決定支援：ディシジョンエイド： 遺伝看護（出生前検査，遺伝教育）	根津あや	2007	出生前診断の意思決定をめぐる妊婦の道徳性に関する文献検討 —二つの道徳性の発達段階に焦点をあてて—
	日田このみ	2008	遺伝サポートグループのメンバーが医療者との交流，また遺伝サポートグループ同士の交流で得られたこと
	上田直子	2008	市民における一般知識としての遺伝情報の理解に関する考察
	小原彩香	2009	医療者が発信する先天異常に関するインターネット情報内容の現状
	松枝智子	2009	医療者に対するターナー症候群の理解に向けた教育案の作成 —ターナー女性への支援について焦点をあてて—
	佐藤かほり	2011	出生前診断の事前遺伝カウンセリングに関する文献検討

表2 修士論文・課題研究（2008～2012）

カテゴリー	氏名	年度	タイトル
A：対象から学ぶから共同事業へ	荒木裕美	2007	「いのちの教育」に参加した親子の変化 —クラス参加後の母親の語りを通して—
	小屋野幸呼	2012	ダウン症候群児の親たちと医療専門職による協働への取り組み
B：意思決定支援：ディシジョンエイド： 遺伝看護（出生前検査，遺伝教育）	新田祥子	2008	看護職者の遺伝及び遺伝教育に対する捉え方 —いのちの教育を実施している看護職者のフォーカスグループインタビューを通して—
	菊岡真梨	2009	不妊医療機関受診前の女性のための意思決定支援リーフレットの作成と評価
	樋口晶子	2009	産科で使用される言葉の産婦の認知度と理解度
	徳武郷子	2010	成人女性に対してe-ラーニングを使用した妊娠前健康教育プログラムの実施，評価
	後藤友子	2011	日本語版共通意思決定尺度：SDM-Q-9の表面妥当性の検証
	藤田志穂	2011	妊孕性に関する知識の獲得に向けた教育プログラムの開発
	市村真季江	2012	HTLV-1抗体陽性妊婦の意思決定支援のためのe-learningプログラムの作成
	津島智子	2012	看護職者に対する成人ターナー女性のe-ラーニングプログラムの作成
	御手洗幸子	2012	出生前検査に関する「見通し」を重視したディシジョンガイドの作成と評価 —妊婦が自分の意向を伝えるために—

Ⅳ. PCC を具現化する人材の活躍

COE プログラムは、「市民主導の健康生成をめざす看護形成拠点」として、PCC を具現化できる人材育成は、大きな目標であった。3 人の若手研究者のその後の活躍を紹介したい。

御手洗幸子氏は、2012年聖路加国際大学（旧聖路加看護大学）大学院看護学研究科看護学専攻修士課程遺伝看護上級実践コースを修了した。御手洗氏は、在籍中の経験について、関連学会のシンポジウム「遺伝看護の専門性とパートナーシップ」において、以下のように述懐している。

「市民が主体者となり医療者と協働する意義を、遺伝看護学上級実践コース在籍中に考える機会を得た。ダウン症候群の方やそのご家族、臨床経験豊富な医師、親の会での交流を培ってきた看護学生の3 者が一同に介し、相互理解を図るための場を作り、それぞれの立場にある者が同じ場所で、お互いが学び合い、エンパワーメントされることを体験した。その後、ダウン症候群研究の第一人者である医師を米国より招聘した主催者の後方支援を行ったことを契機に、市民と医療者が一同に介して出会い、学び合うことで、偏りのない正確な情報を当事者と医療者双方に届けることができると実感した。看護の場は、病院施設、療育施設、地域に留まらず、学校の養護教員、行政機関、看護職の教育現場等、様々である。各々の立場で市民と協働し活躍されている皆様の活動を共有できたらと思う」（御手洗、2016）。

御手洗氏は、修士課程の課題研究で作成した意思決定支援の冊子を国内外に紹介するとともに、在籍中に交流をもった市民団体の方のプロジェクト「ヨコハマプロジェクト」（近藤、2017）の後方支援をいまでも続けている。

有田美和氏は「ダウン症候群のよりよい成育医療検討会（ポルカの会）」に2011年から参加し、2015年に本会が活動を中止するまで中心的な役割を務めた。この5年間の活動を、「ダウン症候群児の家族、看護学生、専門職が協働した体験—ダウン症候群児の成育プログラムの実施

を通して—」として、論文にまとめている（投稿中）。

津島智子氏は、学部在籍時に卒業研究で「医療者に対するターナー症候群の理解に向けた教育案の作成」をし、その後大学院で、助産師の資格を取得し、課題研究でe ラーニングプログラムとして普及させた。修了後は、聖路加国際大学研究センター PCC 実践開発研究部のさまざまな活動（天使の保護者ルカの会、赤ちゃんがやってくる）にボランティアとして参加している。学部から大学院の期間、結婚、2 回の出産というライフイベントを経て、PCC の研究実践をいまの臨床経験に有効に生かしている。

Ⅴ. おわりに

COE に取り組み始めた当初は、PCC とは何か分からない状況で、新しいケアを創り出す過程に学生を参加させるゆとりも発想もなかった。しかし、PCC は市民とのパートナーシップを築いて、そのプロセスを共に歩むことであることが分かってくるにつれて、学生に教育の機会としてさまざまな事業に参加させることができるようになったように思う。COE プログラムを終了した10年目に、当時の若手の研究者の活躍を頼もしく振り返ったことに感謝したい。

引用文献

- 有森直子(2017): 有森科研ポータルサイト. <http://narimori2.jp.org/> (2017/10/30).
- 近藤寛子(2017): ヨコハマプロジェクト. <http://yokohamapij.org/> (2017/10/30).
- 御手洗幸子 (2016): 遺伝看護の専門性とパートナーシップ: 病院勤務助産師の立場から. *日本遺伝看護学会誌*, 15 (1): 20.
- 小屋野幸呼 (2011): 先天性疾患親の会に看護学生が参加したことに対する親の体験. *日本遺伝看護学会誌*, 10 (1): 53.
- 聖路加看護大学21世紀 COE プログラム事務局 (2008): 日本型遺伝看護の創生と普及. *聖路加看護大学21世紀 COE プログラム 市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点研究成果最終報告書*, 12-17.